

# 「詞組本位」との関連から見る 松下大三郎の漢語「連詞」理論<sup>1)</sup>

王 娟・李 無未

Matsushita Daizaburo's "Conjunctions Theory" of Chinese  
in relation to Phrase-based Grammar

WANG Juan, LI Wuwei

Matsushita Daizaburo (1878-1935) was a famous grammarian from the late Meiji period to the early Showa period in Japan. In 1927 he published the Standard Chinese Grammar, which is unique for its Conjunction Theory. Instead of focusing on words, it features distinctive "Phrase based grammar". Theoretical ideas and research methods with Mr Zhu Dexi's viewpoint have similarities, but there is a gap. The theory applies an analytical approach of American Structuralist Linguistics to illustrate Chinese grammar. He is the first scholar in the East to construct a framework of Chinese grammar theory by using Structural Linguistics. This paper examines Matsushita's "conjunctions" theory from the theoretical connotation and the significance in the history of grammar.

Keywords: Matsushita Daizaburo; Conjunction Theory; Phrase based grammar; ZHU  
DeXi

キーワード：松下大三郎、連詞理論、詞組本位、朱德熙

## 一 はじめに

1927（昭和2）年に発表された松下大三郎の『標準漢文法』<sup>2)</sup>は、品詞理論を中心とした他の日本学者の中国語文法体系とは異なり、独特な「連詞理論」を提案した。松下漢文法の「連詞」は一般的に言う中国語文法の「詞組（フレーズ）」の概念に非常に近く、「連詞理論」は朱德熙の「詞組本位」学説と似ている一方、自分なりのオリジナリティもあると筆者らは考えている。また、松下の漢文法には構造主

---

1) 本研究は中国福建省社会科学規畫項目『松下大三郎与近現代中日語法体系形成關係之研究』（FJ2018B161）の研究支援を受けている。

2) 松下大三郎『標準漢文法』（紀元社、1927年）。

義言語学の分析法が用いられており、鮮明な一般言語学の特徴を持つことにより、日本の構造主義の第一人者といわれる小林英夫よりも早い。そのため、本稿では「連詞理論」をめぐって松下の『標準漢文法』について論理的紹介と検討を行い、またその理論の来源を分析し、中国語文法学史における意義と価値を正しく評価することを目的とする。

## 二 『標準漢文法』(1927) の内容及び研究概況

松下大三郎(1878-1935)は大槻文彦、山田孝雄、橋本進吉、時枝誠記とともに日本の五大国語学者と称される。生涯主に中国留学生の教育と文法の研究に尽力していた。『標準漢文法』は中国語の文言を研究対象とし、「総論」「語の単独論」「語の相関論」の三つの部分から構成されており、例文を主に『論語』『孟子』『春秋』『左氏伝』『史記列伝』『老子』『荘子』『韓非子』など中国の古典名作から取り、より新しい例は唐宋八大家の文章からのものである。

松下はまず「総論」で自分の基本的な研究立場を表明した:「言語が多数の人に共通に思想を通じ得る所以は、其の構成に同一体系に統一された一定の法則があるからである。此の言語の構成法則を文法といふ。文法に内面的法則と外面的法則との二面が有る。内面的法則は言語の内面なる思念に関する法則である。思念が声音に表はされる上に於ての法則である。……此れは世界人類に共通普遍的な極めて一般的なものであらなければならない。外面的法則とは言語の外に於ける声音の法則である。声音の思念を表はす上に於ける法則である。……此れはその国語に由って各違ふ」(p2)<sup>3)</sup>。松下は、世界のすべての言語が備える共通の内面法則を研究する科学を「一般文法学」と呼び、各言語の独自の外面法則を研究する研究を「国文法学」と呼んでいる(p34)。また、文法を記述文法学と理論文法学の二つの分野に分けている。記述文法学は「特殊の国語に存するその国文法を記述するものである。固より科学であるから理論を無視する訳ではないが、理論よりは具体的事実を主とし、理論文法学は「具体的事実を経として、理論を主として研究するものである」(p35)。これによって、松下が言語の事実描写と抽象的な論理解釈を区別していることがわかる。『標準漢文法』の章立てはまさに松下のこの思想を反映している。「総論」は文法学の抽象理論を概括しているが、残った第二編の「詞の単独論」と第三編の「詞の相関論」は「総論」の抽象理論に基づき、言語の事実とその規律を整理し描写することが目的となる。

第二編の「詞の単独論」の下にはまた「詞の本性」と「詞の副性」という二章が設けられ、第三編の「詞の相関論」は更に「連詞の成分」「成分の統合」「成分の排列」の三章に分けられている。松下によれば、単独論と相関論は、西洋文法書の Etymology と Syntax の部分にほぼ相当するが、西洋文法書は両者が何を論じているのかを明確にしていない。一方、松下は「私のいふ詞の単独論と相関論とは何れも詞論である」と主張している(p38)。「詞の単独論」は松下の「連詞理論」の基礎となり、「詞の相関論」は「連詞理論」の核心と重点である。松下は一般的な文法書にある句論、構文論(句や文を松下は「断句」と呼ぶ)や文章論の節を設けておらず、単独して品詞を論じる章も設けていない。

現在、松下の漢文法、特に「連詞理論」に関する研究は多くない。日本側は、牛島徳次が1989(昭和

3) 松下大三郎の『標準漢文法』のページ数。以下は同じである。

64) 年に出版した『日本漢語文法研究史』<sup>4)</sup>は有名である。その本は松下の助詞に関する観点に重点を置き、松下の「連詞理論」はそれほど関心を見せておらず、中国語文法学史での松下の価値も十分に認識していない。また、岡井（1934）<sup>5)</sup>も松下漢文法を簡単に紹介しているが、牛島（1989）と同様に連詞理論には触れておらず、松下の中国語文法研究への貢献を正しく評価しているとは言えない。それから、石田（1979）<sup>6)</sup>は松下の漢文法を絶賛し、『標準漢文法』は理論の科学的な精密さ、その文法直観の鋭敏さにおいて、まさに古今独歩であり、一世に卓越した学説だと高く評価しているが、松下の「連詞理論」の貢献を正しく評価していない。中国側の研究では、劉耀武、徐昌華、張麟声が共著した趙（1990）<sup>7)</sup>では、松下の国語文法体系について「こうした思想はソシユール（Ferdinand de Saussure）の連合関係・統合関係、ハリデー（M.A.K.Halliday）の体系・構造の関係に似ている。アメリカ構造主義学派であるブルームフィールド（Leonard Bloomfield）とほぼ同じ観点だ」と述べている。ところが、『標準漢文法』については松下の有題・無題論しか言及していない。

### 三 松下の「連詞」に関する定義

松下は言語単位の分類をする際に階層性を非常に重視している。氏は文法機能によって中国語の言語単位を「原辞、詞、断句（sentence）」という3つの階層に分け、また階層と階層の間に逐次的な構成と被構成の関係が存在しており、またがってはならないと主張している。言語の階層性については、朱（1985）<sup>8)</sup>も言及しており、「すべての人間言語の文法構造は階層的であり、階層性は言語の本質属性の一つだ」と述べている。

松下の「原辞」は最小の言語単位であり、「詞」の構成素となる。「詞」は意味を表す最小の単位であり、「断句」を構成する材料となる。また、「断句」は人間の客観世界に対する主観的認識を表し、「原辞」や「詞」と比べ、初めて表出機能を持つ言語単位となる。朱徳熙も上述と同じような説がある。朱徳熙は「（詞は）独立して活動でき、また意味のある最小の言語成分……文（松下の断句）は前後にポーズがあり、かつ一定のムードを持って完全な意味を表現する言語形式」としている<sup>9)</sup>。

松下は「詞」をさらに「単詞」と「連詞」に分けている。「単詞」は単一構造の言葉であり、意味的には不可分である。例えば、「伯樂」「瑪瑙」「諸葛」「欧陽」など。これらの語は更に分解すれば、分解された部分の語義は原語と無関係になるため分解できない。松下は更に「単詞」の下に「単辞の単詞」と「連詞の単詞」に分け、再分類を行う。例えば、「山」は「単辞の単詞」、「春雨」は「連詞の単詞」とされている。また、「連詞」に関しては、松下が「詞と詞とが一方は他の一方に従属し、一方は之を統率し従属統率の関係を以て二者が統合されてあるもので、外部から観れば一詞として意義を成し、内部から

4) 牛島徳次『日本漢語語法研究史』甄岳剛訳（中国北京語言学院出版社，1989年）。

5) 岡井慎吾「漢文法の研究」（『日本漢字学史』，明治書院，1934年）。

6) 石田博「紹介『校訂解説 標準漢文法』松下大三郎著 徳田政信編」（『国学院雑誌』第103巻第12号，1979年）64頁。

7) 趙世開主編『国外語言学概述語一流派和代表人物』（中国北京語言学院出版社，1990年）323頁。

8) 朱徳熙『語法答問』（商務印書館，1985年）58頁。

9) 朱徳熙「語法分析和語法体系」（『中国語文』1982年第1期）（商務印書館，1985年）11、21頁。

観れば二詞を成してあるものである」(p27) というように定義を付けている。

「詞」より一段上の言語単位は「断句」である。松下はこれを「説話の単位であって断定を表示するものである。即ち或る事柄に対する主観の了解を表はすものである」(p17) と定義している。「断句」の「断」は判断・断定の意味である。「断句」は「詞」で構成されていると同時に必ず「詞」でもある。ここで松下が言った「『断句』が必ず『詞』である」の「詞」は、「嗚呼」のようなごく少数の感嘆詞のような特殊の単語を除き、それ以外はすべて「連詞」である。したがって、事実上松下の「断句」は「連詞」である。更に、松下は表現機能の実現程度を判断する根拠とし、「連詞」と「断句」を区別している。つまり、「連詞」は必ずしも完全な表現機能を持つとは限らず、表す意味も不完全の可能性がある。一方、「断句」は違う。「断句」は単独で表現機能を実現できる言語単位でなければならない。そのため、「連詞」が完全に判断や断定の意味を表現できれば「断句」となる。そして、松下は「連詞」が「断句」になるには独立性と絶対性の二つの条件があると指摘している。この二点は表意上の完全性を強調しているので、自由で膠着していない詞組(フレーズ)のみ独立して文になるという朱(1985)<sup>10)</sup>の考えと類似している。

なお、松下は言語単位を判断する際、すでに多元的な観察意識を備えた。例えば、同じ「春雨」という語に対して、断句を構成する材料という視点からは松下がそれを「連詞」ではなく「単語」の類に入れている。また「辞」というレベルの構成関係という視点からは、松下がそれを「辞」の下位分類である「連辞」の範疇に入れている。

また、松下が構築した中国語の言語体系に「連詞」が核心となることは疑いの余地がない。この核心の下にあるもっと小さい単位の「辞」や「単語」は「連詞」の構成材料であり、この核心の上にあるもっと高いレベルの言語単位の「断句」は「連詞」でなければならない、つまり単一か多層の「連詞」である。この階層性を重視する体系の中では、「連詞」が核心になり、上の言語単位も下の言語単位も、この核心から離れられない。これは、松下の「連詞理論」の基礎となる。

松下が「連詞の成分」の節で述べている次の言葉も上述のまとめを証明している。つまり、「連詞が単語と単語とより成る場合には之を単層の成分関係といふ。例へば『月出』は単層の主体関係、『観月』は単層の客体関係である。併し連詞は単語と連詞とより成る場合も有り連詞と連詞とより成る場合もある。之を複層の成分関係といふ。そうしてこの複層は三層四層に止らず五層にも十層にも及ぶのである。理論上より云へば人間の脳力が許すならばその層数は無限であるべきである」(p568) という内容である。松下は、このように連詞の重ね合わせによって断句を構成している。氏は、従来の文法学者が断句を「文」や「文章」と呼ぶことを批判し、「不適當な用語」(p19) としている。「文」と「文章」は『祭十二郎文』『岳陽樓記』のように主語と述語を備えた完全な体系であるが、断句は主語がなくてもよい文であり、また長さが長くて短くてもよいというのが松下の理由となる。実は、主語と文の長さは松下が強調している連詞と断句の二つの重要な特徴である。つまり、意味表現上の必要があれば、連詞は非常に長いものになってもよい。松下はこのように連詞に形式上の最大な自由を与えたからこそ、連詞を核心とし中国語文法体系を支えることができる。

10) 朱德熙『語法答問』(商務印書館, 1985年) 78頁.

#### 四 松下の連詞分類

松下の連詞分類の基準は、朱徳熙の「詞組」を分類する根拠と同じであり、つまり内部の構成要素間の文法関係によるのである。しかし、松下は自分の分類は中国語の文法だけに合わせたものではなく、「一般文法学」に基づき、分けた五種類は「世界に共通普遍なる」と強調している(p559-561)。具体的な分類は以下のようになる。

##### 1. 主体関係の連詞

この種類の連詞の例として「明月出」が挙げられている。連詞の成分と成分は主語と叙述語の関係であり、主語は叙述語に従属し、叙述語は主語を統率する。表現の焦点は事物の作用や行為であり、事物そのものではない。例えば、「明月出」の重点は「明月」その事物ではなく「出」という行為である。「明月」は「出」に属し、「出」は「明月」を統率する。この種類の連詞について松下は以下の四点の主張がある。第一、主語と叙述語の関係が複雑である。松下は構造の視点から主語と叙述語の間の対応関係を分析し、単独の主語が複数の叙述語に対応することがあれば、複数の主語が単独の叙述語に対応することもあると指摘している。第二、品詞の観点から見た主語と叙述語には多様性がある。名詞や副詞は主語に、動詞や叙述態の名詞は叙述語になることができるという。第三、この種類の連詞は述語あるいは主語など断句の成分になることもできる。第四、主語には大主語と小主語、主語と題目語、また真の主語と準主語の区別がある。なお、松下の主体関係の連詞は朱徳熙の「主述構造詞組」に相当する。

##### 2. 客体関係の連詞

例として「賞明月」がある。帰着語と客語の関係であり、帰着語は客体(目的物)に帰着する作用を表し客語を統率する。客語はその作用の客体(目的物)を表し、帰着語に従属する。例えば「賞明月」の「賞」は帰着語で、「明月」は客語である。

客体関係の連詞について松下は六点の問題を主として論じている。第一、相対概念の観点から観れば帰着語が叙述語と異なる。松下は文法構造における概念は相対的であり、絶対的のものではないと述べている。具体的に言うと、叙述語は主語に対する概念であり、帰着語は客語に対する概念である。例えば、次の図1の「人飲酒」において、「飲」は「酒」に対して帰着語であるが、「人」に対しては叙述語の一部であるということである。

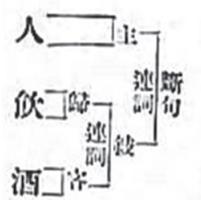


図1 「人飲酒」の構造図 (p610)

第二、客語が複雑である。客語には大客語と小客語があり、準客語もある。第三、品詞から見た客語は、表示態名詞、副詞、普通動詞、横型動詞の四種類がある。第四、品詞からみた帰着語には、帰着態の本動詞、帰着態の形式動詞、前置詞、帰着性の名詞の四種類がある。第五、述語の動詞に関わる時間、空間、原因と比較などの情報を表す語は帰着語とされており、それぞれ時間的依拠化、空間的依拠化、原因的依拠化、比較的依拠化と呼ばれている。第六、「之」「所」の特徴も詳細に分析されている。例えば「我讀書」の場合、「読」は帰着態動詞で、「書」は客語である。一方「我讀之書」では、「之」を媒介にして「読之」が被修飾語「書」の「連体語」になる。また、「我所讀之書」では、「所」の存在によって内包的な客語が形成されているため、「読」は帰着態動詞のままである。なお、客体関係の連詞は朱徳熙の「述賓構造詞組」に相当する。

### 3. 実質関係の連詞

実質関係の連詞（例「明月之（光）」）は実質語と形式語の関係である。実質語は実質的な意味を表す材料だけを提供し、連詞の重点ではない。形式語は形式概念を表し、実質語を統率し、連詞の重点になる。形式語には「者」「之」「乎」「也」などの例がある。

松下は実質関係の連詞を更に通常実質関係と対等実質関係の二種類に分けている。「入者主之、出者奴之」「足乎已五待乎外之謂徳」「告子曰性猶杞柳之」の中にある加線部分はすべて通常実質関係である。対等実質関係とは、「山高月小水落石出」のような対句である。このような対句に関して松下は独自の見解を持っている。例えば「山高月小水落石出」では「山高月小」と「水落石出」が対等的な関係であるという解釈は一般的であったが、文法的な視点からの分析ではないと松下が指摘している。松下によれば、「水落石出」は独立しており、「山高月小水落石出」のように終止状態で結ぶ以外に、「山高月小水落石出処有人汎舟」というように後続の名詞につながる可能性や、「山高月小水落石出則我知其既冬至」のように仮説を作って後続の動詞を見交わす可能性もある。しかし、「山高月小水落石出」の前半の「山高月小」部分が異なるという問題も、松下に指摘されている。つまり、この部分は独立したのではなく、後半部に依存し、用法は後半部に決められており、自由に変換できないということである。

また、松下は、実質語と形式語の品詞を詳しく分析した。名詞、動詞の一般格および副詞の実質的用法の三種類が実質語になり、単純形式名詞、単純形式動詞、単純形式副体詞、形式感動詞の四種類が形式語になるという。しかし、名詞、動詞、副詞に実質的な用法があるかどうかは、単独では判断できず、形式語と組み合わせてはじめて判断できるのである。松下のこの観点は氏の品詞観と関連する。氏は品詞の分類には形式的意味と実質的意味の二つの基準があると言っている。例えば名詞は、本名詞、代名詞、不定名詞、形式名詞の四つに分類される。本名詞は「鳥」「獸」のような直接的実質的な意味を表す名詞であり、代名詞は「私」「汝」のような指示詞で、間接的実質的な意味を表す。そして、不定名詞とは「何」「誰」など実質的な意味が定まらない名詞のことであり、形式名詞とは、「者」「等」「之」など、実質的な意味を持たない名詞のことである。

### 4. 修用関係の連詞

修用関係は、「今宵賞月」のように修用語と被修用語で構成された連詞の関係を意味している。修用語

は動作行為を修飾し、その動作や行為の特徴を表す語であり、従来の修飾語に相当する。それに対して、被修用語は動作行為の本体に関する概念を表す。例えば「今宵賞月」は修用関係の連詞である。「今宵」は修用語であり、被修用語の「賞月」という行為を行う時間を表す。この種類の連詞は中国語文法の「動詞偏正結構」に近く、朱徳熙に「偏正結構詞組」に分類されている。

また、松下はムードによって修用語を平説的修用語、提示的修用語、断句的修用語の三種に分類している。「従北地来」「万古千秋对洛城」「教夫婿覓封侯」では、下線部分が修用語であり、線のない部分の属性を平叙しているため、平説的修用語である。第二の提示的修用語は、例えば「酒不嗜、色不好」「酒亦嗜之、色亦好之」がある。この二つの例にある「酒」と「色」は「嗜」「好」の客語であるが、読む人の特別注意を引くために前置きにされた。さらに前置きになったため、「酒」と「色」は本来の客語の機能を失い、単なる修用語になった。松下の解釈によると、提示的修用関係は実は倒置文のことだと分かる。松下はこのような修用語の前後で使用される副詞、形式感動詞などの違いに応じて、提示的修用語を題目語と単純提示語に、題目語を分説、合説、単説に、単純提示語を大提示語と小提示語に再分類している。第三の断句的修用語の例として、「奈之何、民不窮且盜之」が挙げられている。「奈之何」は単独で一つの断句になることもできるが、この連詞では「民不窮且盜之」を修飾する材料となって断句的修用語となった。

なお、松下の修用関係の連詞は強い包容性と展開性がある。単文、複文、倒置文などよく構文論のテーマにされる問題は、松下が連用関係の連詞の範疇に入れている。修用関係連詞の題目語及び断句的修用語そのものは断句になることができるからである。ただし、題目語と断句的修用語は特殊な性質があり、一般的な断句と違うことも指摘されている。例えば「其暫為朋者偽也」「人之与之錢則辞」の下線部分は連詞の題目語であると同時に断句でもあるが、独立性を失った特殊な断句である。この例を見ると、松下はいかなる「連詞理論」を用いて構文論の問題を解説するかが分かる。

## 5. 連体関係の連詞

「此良宵」のような連詞は、連体語と被連体語の関係となる。「此」は連体語で、「良宵」は被連体語である。また、下位分類として、松下は連体語と被連体語の間の意味的な関係に基づき、連体語を修飾性連体語、相対性連体語と主体性連体語の三種類に分ける。修飾性連体語は連体語のより詳しい情報を補足する役割を担うだけであり、被連体語の独立性に影響を与えない。例として「二月之花」がある。「二月之」は「花」の情報を補足するが、なくても「花」の独立性に影響が出ない。また、相対性連体語は相対的概念の基準を提供するのである。この基準がなければ、連詞中の相対的概念は成り立たない。例えば「呉起之妻」の「妻」は、「夫」と相対的概念になる。この場合、連体語の「呉起之」はその基準を提供している。もし「呉起」がなければ、「妻」は「夫」を失い、ここの相対的概念は成り立たなくなる。それから、主体性連体語の場合、その種類の連体語になるのは「其（厥）」と「之」の二つの副体詞のみだと松下が述べている。

松下の連詞分類の方法は朱徳熙の「詞組」の分類方法と類似点があるが、異なる部分も少なくない。ところが、「連詞」の本質からみると、松下の「連詞」が朱徳熙の「詞組」であると判断できる。

## 五 松下の「連詞理論」と朱徳熙の「詞組本位」学説

松下大三郎が100年近く前に提唱した「連詞理論」は中国語文法研究史にあった有名な「詞組本位」学説と同じではないか。この問題は、松下漢文法に対する正しい評価ができるかどうかに関係しており、非常に重要である。邵（2006）<sup>11)</sup>によれば、正式に「詞組本位」学説の旗を立て、理論から説明したのは朱徳熙である。以下では、朱徳熙の「詞組本位」学説を主要な参考物とし、学説の核心的な理論観点と研究方法の二点から松下の「連詞理論」を考える。

福沢（1875）<sup>12)</sup>は「本位」に関して「相対して重と定りたるものを議論の本位と名く」という解釈がある。そして、中国語文法研究史上いくつか有名な「本位」学説があった。例えば馬建忠の「詞類本位」、黎錦熙の「句本位」、朱徳熙の「詞組本位」、徐通鏞の「字本位」などがある。これらの学説は一言でまとめると「詞類（品詞）」、「句（文）」、「詞組（フレーズ）」と「字」のどれかの言語単位を根本・基本・中心にして中国語文法体系を構築していることである。

また、「詞組本位」の解釈として、朱徳熙本人は「中国語では文の構造原則が詞組（フレーズ）の構造原則と基本的に一致しているため、私たちは詞組に基づき文法を描写し、また詞組を基点にする文法体系を構築する可能性はあるのであろう」と述べている。氏は「詞組」の中国語文法体系にある「本位」の位置づけを強く主張するだけでなく、「句本位」学説の観点を批判した：句本位は中国語の文法に当てはめると、一つ肝心な問題を生じ、不合理になる。つまり「詞組」と「文の成分」という二つの概念の間に矛盾が生じる。「句本位」学説は、詞組の存在を認める一方、詞組が文の成分になることは認めない。文の中に詞組がある場合、「句本位」派はその詞組が詞組ではないと証明しようとしている。朱氏は、「各種の詞組の構造と機能を十分に描写できれば、文の構造も明確に描写することができる。文は独立した詞組に過ぎないからだ」と述べている<sup>13)</sup>。

一方、松下は中国語文法体系における「詞」の位置づけについては、すべての断句が詞であり、同じ内容が断句であれば必ず同時に詞でもあると強く主張している。ただ、「詞」はひとつの概念を表すだけであり、「断句」はそれ以外に判断のモードも持っているという。松下は「詞」と「断句」の関係を「木」と「机」で例えた。「詞」は材料で、「断句」は結果であるという（p28、29）。そして、「詞」はまだ「話」ではないが、「話」は「断句」でなければならない（p17）。松下のこのたとえは朱徳熙の説と似ている。朱徳熙は、文を抽象的、そして特殊的なもののみなし、「詞組」から「文」へは実現関係である。つまり、抽象的な文法構造と具体的な「話」との関係である<sup>14)</sup>。松下氏は文法書に詞論の章しか設ける必要がなく、構文論と文章論を設ける必要がないと主張し、構文の内容をすべて詞論の章に置いて議論する。それは、「世間の文法書の文章論に論ずる所は主語、述語、客語、修飾語等の問題即ち詞と詞との相関論である。詞々の相関論以外には何物も無いのである。詞々の相関論は詞論であって文章論ではない」か

11) 邵敬敏『漢語語法学史稿』（商務印書館、2006年）346頁。

12) 福沢諭吉『文明論之概略』（岩波文庫、1875年）。

13) 朱徳熙『語法答問』（商務印書館、1985年）74、76頁。

14) 朱徳熙『語法答問』（商務印書館、1985年）75頁。

らである（p40）。ここでは、松下が言った詞と詞の関係は実は「連詞」の構造問題であり、文のレベルの問題ではない。そのため、この話はすでに松下の「中国語文法の基本は連詞であり、断句ではない」という「連詞理論」の核心的な観点を表明している。

次に、松下の「連詞理論」と朱徳熙の「詞組本位」学説の分析方法を比較してみよう。

まずは階層性に関する考え方である。朱徳熙は文法を分析する際、文法構造の階層性の視点に基づいた「直接成分（immediate constituent）分析法／階層分析法」を強く提唱しており、「構文解析を行うには階層分析が不可欠であり、階層分析は構文解析に不可欠な手法の一つであり、採用してもしなくてもよい方法ではない」と述べている<sup>15)</sup>。松下も文法構造の階層性を重視している。氏はこの階層性を血縁関係に喩え、親と子の間は直接の関係であるが、兄弟の間は同じ親を持つためつながっており、間接的な関係であると考えている。連詞の場合になると、従属語と統率語との関係は直接なので「一親等」である。従属語が二つ以上ある場合、一つの統率語に従属するため間接関係になり、「二親等」である（p796）。

また、松下は言語現象の描写に重きを置いているが、理論的な解釈もある。連詞や断句の構造を分析する際、構造言語学の典型的な分析方法の直接成分分析法<sup>16)</sup>を用い、小さい成分から大きい成分へ連詞や断句の構造を分析している（p567、568、610、612、616）。上述の図1はその一例である。松下は、連詞構造に中心語が存在することを強調し、その中心語を「統率部分」と呼び、それ以外の部分は統率部分に従属すると述べている。また、断句にもこの特徴があるという。つまり、松下の「連詞理論」には構造主義言語学の内心的組み立て法と直接成分解析法がすでに使われており、アプローチが多様であると考えられる。

第二に、言葉の形式と意味に対する見方である。朱徳熙は言語は形式と意味の二つの面を含み、形式上検証できない意味解析は文法研究にとって価値がないとみなしている<sup>17)</sup>。また、氏は「詞」の判断基準を考える時構造の面から考えないといけないと強調している<sup>18)</sup>。一方、松下は文法学は言語の構成法則を研究する学問であると考えている（p35）。氏が構築した漢文法体系も朱徳熙と同じ、言語の形式と意味を両立しており、形式は言語単位を区分する主要な根拠・要素とし、意味はただ言語分析の副次的な要素としている。具体的には、氏は形式上独立するかどうかによって、「辞」を「不完辞」と「完辞」に分け、また内部構造によって「単辞」と「連辞」に分ける。「断句」に対して下位分類をする際には、いずれの分類法にしても、意味ではなく構造や形式を判断基準としている。

しかし、松下の「連詞理論」は朱徳熙の「詞組本位」学説と違うところもある。松下は朱徳熙が言った「詞」と「詞」をひとまとめにして「詞」と呼ぶことにしているが、松下の「詞の単独論」は実際には「単詞（朱徳熙の「詞」）」の問題であり、「詞の相関論」は実際には「連詞（朱徳熙の「詞組」）」の問題である。従って、朱徳熙は形態素、語及び文の関係に対して更に明確な認識と区分があると言えるで

15) 朱徳熙『語法答問』（商務印書館、1985年）58頁。

16) 中国語文法では「線型序列方式」とも呼ぶ。

17) 朱徳熙『語法答問』（商務印書館、1985年）80-81頁。

18) 朱徳熙「語法分析和語法体系」（『中国語文』1982年第1期）14頁。

あろう。

また、松下の「詞」と「断句」の関係についての記述にもまだ未熟な面がある。松下と朱徳熙は、「詞」が最小の表意単位であり、「断句」が初めて表出機能を持つと指摘しており、両者の本質的な認識は一致している。朱徳熙は言語単位の関係にも明確な区別をつけており、詞と詞組との関係を「組合」と呼び、詞組と文との関係を「実現」と呼んでいる。一方、松下は区別をせずに、「辞」を「詞」の「材料」、「詞」も「断句」の「材料」と呼び、「辞」と「詞」の関係であっても、「詞」と「断句」の関係であってもすべて「結合」の関係にしている。

## 六 松下漢文法理論の来源

『標準漢文法』は1927（昭和2）年に出版され、その3年前の1924（大正13）年に松下が『標準日本文法』<sup>19)</sup>を出版した。上の章で整理した分析方法を含める松下漢文法理論に現れた構造主義言語学の特徴は、『標準日本文法』ではすでに芽生えが見えた。例えば、「原辞・詞・断句」の言語単位三分法、直接成分分析法、内心的組み立て法、原辞論、格と相に関する観点などである。

松下と同時代の中国語文法学者は、中国語文法の問題を分析する際にインドや西洋の文法体系を模倣することが盛んであったが、松下は既存の文法理論を模倣すべきではないと主張し、特に英文法を模倣して中国語の品詞を分類することを批判した。氏は『標準漢文法』では文法の研究は世界に共通普遍的な人間言語の根本法則、すなわち普通言語学の理論を探求すべきだと繰り返して強調している（p2、35、53、78、559、561）。また、普通言語学の観点は、松下が1895（明治28）年に発表した『文典学と語理学とにつきて』<sup>20)</sup>という論文ですでに提示しており、これも松下が生涯を通じた主要な観点である。塩沢（1992）<sup>21)</sup>は、松下を普遍文法の創始者とし、松下が提唱した普遍文法はイエルクスレウ（Louis Hjelmslev）、ブルームフィールド（Leonard Bloomfield）、チョムスキー（Avram Noam Chomsky）よりも早いと松下を高く評価している。

また、松下漢文法はすでに言語類型学の意識を持っている。松下が『標準漢文法』で中国語文法と日本語文法の比較を大量に行っている。比較の目的は両者の違いを求めることではなく、両者に存在する同じ種類の文法現象を探ることである。例えば提示的修用語を論じる際、松下は中国語では「不嗜酒」の「酒」は「嗜」の客語で、「酒不嗜」の「酒」は「嗜」の修用語だと述べている。そして、日本語にも似ている例があると指摘している。例えば「酒を嗜まず」の「酒」は客語で、「酒をは嗜まず」の「酒」は格助詞「は」の登場により後ろの動詞との直接的な関連を失い、他の事物との対比という内面的な意味を生じさせ、提示的修用語になった。松下はこのように文法現象を描写する方法を多く使い、中国語文法と日本語文法の間には存在する同じ種類の特徴を整理しようと試みていた。それらの特徴は世界中の言語に適用できるとは限らないが、せめて中国語と日本語を含む一部の言語に適用されるのであろう。

19) 松下大三郎『標準日本文法』（紀元社、1924年）。

20) 松下大三郎「文典学と語理学とにつきて」（『国学』8、1895年）11-19頁。

21) 塩沢重義『国語学史における松下大三郎一業績と人間像』（桜楓社、1992年）。

それから、松下漢文法は典型的なアメリカ構造主義言語学の方法も用いている。この特徴に関しては、趙（1990）も指摘している。「氏（松下）の原辞はアメリカ構造主義言語学の形態素とほぼ同じである。意味の最小単位であると同時に詞を構成する基本単位でもある……氏は、一般に言う詞が独立して意味の表す自由形式としている。それはブルームフィールド（Leonard Bloomfield）の『意味がある最小の自由形式』という『詞』の定義とほぼ同じである……氏の原辞論は詞の構造そのものである……氏は詞論で相と格を区別し……氏のこのような考えは、ソシュール（Ferdinand de Saussure）の連合関係と統合関係、ハリデー（M.A.K.Halliday）の体系と構造の関係と類似している。アメリカ構造主義学派のブルームフィールド（Leonard Bloomfield）の考えとほぼ同じだ」<sup>22)</sup>と述べている。

筆者は松下の『標準漢文法』より前に出版された日本の他の中国語文法書を考察してみた。大槻文彦の『大槻文彦解 支那文典』（1877）<sup>23)</sup>、岡三慶の『岡氏之支那文典』（1887）<sup>24)</sup>、児島献吉郎の『漢文典』（1903）<sup>25)</sup>、広池千九郎の『支那文典』（1904）<sup>26)</sup>と『増訂支那文典』（1915）<sup>27)</sup>などが有名である。これらの文法書では「詞組本位」に近い学説が見つからず、構造主義言語学に近い分析方法も使わなかった。また中国国内では、初めて直接成分分析法を紹介したのは趙元任の『北京口語語法』（1952）を翻訳した李栄であり、初めて直接成分分析法を全面的に中国語文法研究に使うのは朱德熙の『句法結構』（1962）である<sup>28)</sup>。朱德熙はアメリカ構造主義言語学を現代中国語文法研究に応用した先駆であり、また模範でもあると中国国内では一般的に認識されている。松下漢文法の時間から考えると、松下は中日では初めて「詞組本位」の研究意識を芽生えさせた学者であり、李栄より25年も早かった。この意味から言うと、松下が構造主義言語学の先駆者であり、東洋での実践者でもある。さらに、松下は1920年代にはすでに一般言語学の意識を持っており、チョムスキー（Avram Noam Chomsky）よりも早かったため、日本の一般言語学の先駆者と言えるであろう。ところが、松下の連詞理論は、従来の学者に重視されていなかった。

さて、松下の連詞理論はいつ、またどのように形成されたか。以下の図2は松下が1895（明治28）年に発表した『文法学と語理学とにつきて』から引用したものである。この図から、論文の発表当時松下が考えていた文法体系が品詞と句論を核心にしていたことが分かった。つまり、連詞理論の文法観はまだ形成されていない。したがって、松下の連詞理論は1895（明治28）年から1924（大正13）年までの間に形成された可能性が高いと考えられる。松下は『標準漢文法』の「自序」で、「此の書には著者の初めて考へ出した事柄が非常に多い……謙遜なしに言へばまさか全部が愚論である」と述べている。しかし、松下が1895（明治28）年から1924（大正13）年まで29年の間に品詞論や句論を中心とする観点から連詞理論まで大転換を生じさせたのには、きっと何かのきっかけがあろう。一つの可能性として、松下が国

22) 趙世開主編『国外語言学概述語一流派和代表人物』（中国北京語言学院出版社，1990年）322-323頁。

23) 大槻文彦『大槻文彦解 支那文典』（大槻文彦，1877年）。

24) 岡三慶『岡氏之支那文典』（松柏堂，1887年）。

25) 児島献吉郎『漢文典』（富山房，1903年）。

26) 広池千九郎『支那文典』（早稲田大学出版部，1904年）。

27) 広池千九郎『増訂支那文典』（早稲田大学出版部，1915年）。

28) 于思湘「結構主義語言学及其直接成分分析法述評」（『淄博師專学报』1996年第3期）56頁。

学院大学に務めていた頃の学長である上田万年が考えられる。劉 (2013)<sup>29)</sup> の説明によれば、ドイツやフランスでの留学を終え帰国した上田万年は、1894 (明治27) 年から欧米言語学を紹介する博言学講座を開設した。松下は上田万年の講座を受け、また自分の考えも加え、その後の「連詞理論」にたどり着いたのではないか。

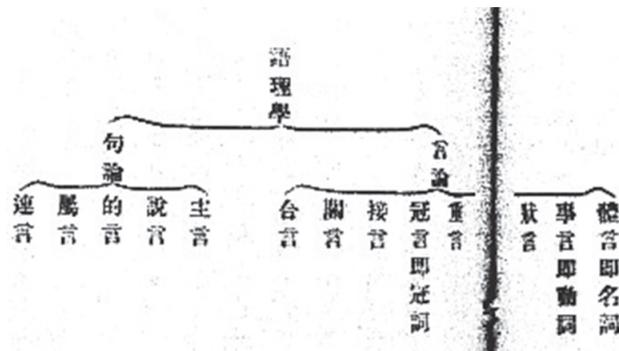


図2 松下大三郎『文典学と語理学とにつきて』の分類表 (1895: p.18-19)

## 七 中国語文法学史における意義

「詞組本位」学説の中国語文法学史における意義について、林 (2006)<sup>30)</sup> は次のように高く評価している。つまり、「詞組本位」は文の成分ではなく、詞組の構文構造に本位を定める学説は、中国語の品詞と構文成分が簡単に1対1に対応していないという特徴に相応しく、「品詞の判断が難しい」「品詞転化の例外が多すぎる」などの問題を解決し、中国語文法研究に重要な貢献をした。

日本の中国語文法研究界では、松下より前の学者は品詞分類を中心としており、松下の漢文法は日本の中国語文法研究が「詞組本位」という斬新な段階に入ったと宣言している。同時代に中国国内では黎錦熙の『新著国語文法』(1924)<sup>31)</sup> が出版され、「句本位」学説の登場となり、その38年後は朱德熙の『句法結構』(1962) で代表した「詞組本位」学説の出現であった。松下は『標準漢文法』で理論研究の体系を構築した上で実践的な考察もあり、早くも1927 (昭和2) 年に連詞 (詞組) に関する研究や中国語の文言の文法研究に一種の研究模範を提供している。

よって、松下は優れた先見性を持つ最も革新的な学者の一人であり、氏の「連詞理論」は中日の中国語文法学史において、時代を意味する重要な研究成果だと言えるであろう。

29) 劉学「西方構造主義語言学对日本語言学發展的影响」(『外語研究』2013年第4期) 54-58頁。

30) 林玉山「論朱德熙的語法思想」(『福建師範大学福清分校学報』2006年第4期) 2頁。

31) 黎錦熙『新著国語文法』(商務印書館, 1924年)。